

日本性科学会 ニュース

第35巻 第3号

平成28年（2016年）9月

発行人：大川 玲子 印刷所：(株)絢文社

2017年研修会・学術集会開催予告

第11回日本性科学会近畿地区研修会

毎年、日本の性科学を導く、ご高名な先生方にご講演をいただいております日本性科学会近畿地区研修会ですが、来年度は下記のように開催させていただきます。

日本一高いビルディングで、人間の原点であるセクシュアリティについて語り合う研修会に、ぜひご参加ください。

テーマ：現代における多様な“性”的あり方

日 時：2017年2月12日（日）13:00～16:30

会 場：あべのハルカス会議室25階CD会議室

単 位：日本性科学会（5単位）日本産科婦人科学会 大阪府医師会

担当理事：石河 修

第46回セックス・カウンセリング研修会

日 時：2017年5月28日（日）

会 場：東京慈恵会医科大学西新橋校1号館5階講堂

受 講 料：一般12,000円 会員10,000円 学生 3,000円

第37回日本性科学会学術集会

日 時：2017年10月15日（日）/第18回性科学セミナー 2017年10月14日（土）

会 場：大阪府立大学I-siteなんば

〒556-0012 大阪市浪速区敷津東2丁目1番41号 南海なんば第1ビル2・3階

(地下鉄御堂筋線「大国町駅（1番出口）」下車、東へ約450m、徒歩約7分)

TEL 06-7656-0441（代表）

学 会 長：山中 京子（大阪府立大学地域保健学域教育福祉学類/大学院人間システム科学研究科教授）

第15回医療従事者向けーがん患者さんの性を支援する研修会

日 時：2016年11月19日（土）9:00～17:00

会 場：上智大学四谷キャンパス2号館4階415教室

受 講 料：10,000円

申し込み：日本がんと性研究会HP <http://square.umin.ac.jp/oncosexo/> の申し込みフォームからお申し込みください。

プログラム：総論1 女性の性反応と性機能障害

総論2 がんが性に与える影響

各論1 乳がん

各論2 婦人科がん

各論3 がん薬物療法

各論4 ストーマ造設

基本的セックスカウンセリング—インタークから性相談への対応—

なお、本研修会は今回をもって終了いたします。最後の機会に多数のご参加をお待ちいたしております。

Vol. 35

日本性科学会

〒113-0033 東京都文京区本郷3-2-3 森島ビル4F

No.
3

TEL・FAX 03-3868-3853

WPATH 24th Scientific Symposiumに参加して

関西医大 精神神経科学講座 織田 裕行

6月17日から21日まで、アムステルダムでWPATH (World Professional Association for Transgender Health) 第24回国際会議(隔年)が開催され、参加する機会を得ましたので拙い内容ですが少しご報告させて頂きます。

ご存じの方も多いと思いますが、WPATHはTransgenderの健康に関する世界最大の専門家組織です。このWPATHが発行しているSOC (Standard of Care; Standard of Care for the Health of Transsexual, Transgender, and Gender-Nonconforming People)は、日本精神神経学会の「性同一性障害に関する診断と治療のガイドライン」を作成する際の重要な参考資料になっており、現在第7版が発行されケアに関する国際基準として日本語を含めた多言語に翻訳されています。また、今年開催された第24回国際会議には約1,000名が参加されたとのことです。

さて、今回のWPATHに参加した私の目的は「脱精神病理化」の空気を感じ、「児童青年期の関わり」について考えることになりました。

精神科領域では国際的な診断基準としてWHOによるICD分類と、アメリカ精神医学会によるDSM分類が用いられています。ICD-10とDSM-IVでは性同一性障害(Gender Identity Disorder)と分類されていた概念が、近年、その理解と名称に変化が生じています。2013年に公開されたDSM-5では性別違和(Gender Dysphoria)へと変更されました。名称から障害(Disorder)が削除されたことは、その概念の変化を表しています。ICD-11では、Gender Incongruenceへの変更が検討されているように聞きます。一方、日本では「性同一性障害者の性別の取扱いの特例に関する法律」や、「性同一性障害に関する診断と治療のガイドライン」に「性同一性障害」が用いられており、現在まで変更されていません。

普段の臨床場面を振り返ると、私は専門外来において主に2つのことをしているように思います。一つは、性別違和と診断がつくのか、それとも性成熟障害や他の精神疾患の影響から訴えられているものなのかの鑑別です。受診者の中には、職場の理解を得てホルモン療法をしながら望む性で10年近く就労された後に性別適合手術を受けることを希望して受診される方から、「どのような性で生きていきたいのか分かりません。だからここで診断をつけてもらいたくて受診しました。」のようにおっしゃる方まで幅があります。後者のように自身の身に生じていることを言語化することが困難な方の鑑別は難しく、その意味においてはガイドラインの必要性が理解できます。もう一つは、「表出するジェンダー」と「指定されたジェンダー」との不一致から生じた不適応状態に対する精神医学的介入です。性別違和に端を発して二次的に生じた精神症状に対する治療ですから、性別違和に対して治療をしているわけではありません。そう考えた時に、性別違和を精神疾患とあえて位置付けるだけの意味は何かあるのだろうかと思うことがあります。

本会では、すでに「Gender Identity Disorder」を見聞きすることは無く、その言葉を発音していたのは私くらいなのかも知れません。

最近になって、私のところにも児童期の受診依頼がくるようになりました。かつて、専門外来を開設したころに成人の方々からお聞きしてきた児童期のエピソードと、現在児童期にある方から得られる話の内容に共通点はあるものの、変化したと感じられる点もあります。その一つは家族や友人との関係です。特に、以前は親に良く見受けられた肯定的であるにせよ否定的であるにせよ過剰であった反応が、徐々に冷静な反応に変化してきている点です。そのことと並行して、本人においては身体的治療に関するこだわりや焦りに変化が見られ、学校とも話し合いをして現状で出来る事をしながら折り合いをつけて通学されているように思います。これらの変化が成人してからの人生にも良い形で結び付くことを願ってやみません。

本会では、「児童青年期」に関する多くの発表がありました。自閉症などの精神疾患が併存する場合や、未成年者の「身体的治療の自己決定能力」について、発表にとどまらない活発な議論がなされていました。また、どのような支援を行うことが良いのかについても注目されており、児童生徒当事者の交流会を開催されている教育者であり研究者でもある土肥いつき氏による活動が高く評価され、「Outstanding Student Contribution Award」を受賞していました。授賞式では様々な想いを「This is for my fellow transgender kids!」という短い言葉にこめて表現されていたことを最後に記しておきたいと思います。



ドクターが実践する性教育実践

咲江レディスクリニック 丹 羽 咲 江

10年間の総合病院での勤務の後、平成14年に名古屋市内でクリニックを開設した。クリニック開設後は、予期しない妊娠の結果やむを得ず人工妊娠中絶術を受ける女性や、性感染症に何度も罹患してしまう女性など、勤務医時代に診療していなかった女性に遭遇する機会が増え、これらを予防する方法を伝える必要があると思い性の健康教育を始めた。

開院から14年、子どもたちが正しい性の具体的な知識を得る機会は相変わらず乏しい。その一方で、インターネットやスマートフォンの普及によって歪んだ性の知識を得たり、SNSを介して容易に相手を探すことができる環境となった。

更に最近では、動画をお手本にした男性からの一方的なセックスのため性交時や性交後の痛みを訴えて受診する女性や、「性は危険なもの、いやらしいもの」「いつでも妊娠できる」といった漠然としたイメージによって40歳頃になって妊娠を希望して受診する女性も増加の一途をたどっている。「性行動に伴うリスクに対する知識を伝える性教育」から、「将来パートナーとの対等な関係を築き、ライフサイクルを見据えて自分の生き方を決めていくことができるよう導くための性の健康教育」へと時代の流れとともに子どもたちに伝えられる内容も変化してきている。平成26年度は愛知県内の学校で年間38校、愛知県内の少年院では3件の子どもたちに性の健康教育を、教師や親など子どもたちの支援者に対する性の健康教育を32件おこなった。

○性の健康教育の実際

学校側の依頼や講演時間、生徒のカラーや年齢に応じて、思春期のこころとからだの変化、デートDV・パートナーとの対等な関係、プライベートゾーン、性感染症、妊娠（妊娠出産の経過、危険日安全日、妊娠検査薬の正しい使い方、より確実な避妊法、コンドームの落とし穴、人工妊娠中絶、緊急避妊ピル）、ピルの適切な使い方、インターネットやスマートフォンの正しい情報の選択について、セクシュアル・マイノリティ、妊娠・出産適齢期、ライフィベントの項目から必要な内容を選択している。

- ・現在虐待を受けている子どもや「望まれずに生まれた」子どもたちも講義を受けている。またひとり親家庭も増加している今、「あなたは両親から望まれて生まれてきた。産まれてきたときは本当に嬉しかった。あなたたちは大切に育てられた」といった言葉を使うと深く傷つく子どもがいる事を配慮する必要がある。「ここまで大きく育った自分をすばらしい存在だと思おう」と伝えるようにしている。
- ・受診する女性たちを診察していると、正しい知識を持っていてもそれをパートナーに伝えることが出来なくて不本意な結末になってしまう女性をしばしば目に見る。「自分の気持ちを相手に言葉で伝えることの大切さ」や「パートナーとの対等な関係について」をどの年齢でも伝えるようにしている。また、「性はいやらしいもの、恥ずかしいもの、隠さなくてはいけないもの」ではなく、「パートナーとのコミュニケーションを図る大切なことであり、そのリスクを的確に知って性の衝動を正しくコントロールすべきもの」ということを明確に伝えるように努めている。
- ・何らかの理由で学校に来られない子どもたちは性の健康教育に触れる機会がない。そのため、性教育用DVD「からだと心のヒミツ」を作成し、学校や子どもたちの支援をする方々に配布して子どもたちの性の健康教育に役立てていただいている。

○ドクターが性の健康教育をするということ

「命は大切」ということを伝える一方で、「キレイ事だけでは済まされない現実」についても伝える必要がある。実際に子どもたちを診療しているからこそ、子どもたちのリアルな体験談や何が危険なことでどう対応すべきか、いつ・誰に助けを求めれば良いのかを伝えることができ、子どもたちも納得しやすい内容を伝えることができる。また、月経痛や月経前症候群の改善といったピルの副効用等の指導要領に含まれていない内容は教員が指導し難いが、外部講師は踏み込んで指導できるという利点がある。何よりも、医師が性教育で実際に子どもたちに顔を見せることで病院受診のハードルを下げる、本当に困った時に受診をしやすくなるという利点がある。養護教諭とも繋がりができるため、困った時にいち早く相談できる様なネットワークをつくることもできる。地域の駆け込み寺となれるように、今後も活動を続けていきたい。



第45回 性治療研修会の報告

日本性科学会幹事 大谷 真千子

平成28年5月22日(日)に開催した第45回セックスカウンセリン研修会には、86名の方々にご参加いただきました。アンケート結果の一部を以下にご報告します(回答数49名:会員39名、一般10名)。

- ✓ アンケートにお答えいただいた方の職種の内訳を示します。

表1. Q. 職種(数値は実員数)

	医師	臨床心理士	看護職	教育職	その他	無回答	合計
合計	22	6	14	4	3	0	49

- ✓ 演題に対する評価を示します。

表2. 演題に対する評価

演題	Q1. 講義内容は役に立ちましたか?			Q2. 講義内容はわかりやすかったですか?	計
	とても役立つ	まあ役立つ	計	とても分かりやすい	まあ分かりやすい
DSM-5における性障害の診断基準	29 (59%)	16 (33%)	45 (92%)	30 (61%)	15 (31%)
年代別にみる男性の性機能障害	29 (59%)	18 (37%)	47 (96%)	33 (67%)	14 (29%)
女性性機能不全	33 (67%)	14 (29%)	47 (96%)	27 (55%)	19 (39%)
男性不妊診療について	40 (82%)	4 (8%)	44 (90%)	44 (90%)	4 (8%)
インティック・ロールプレイング	25 (51%)	10 (20%)	35 (71%)	23 (47%)	15 (31%)

「インティック・ロールプレイング」を除き、9割以上の方から「役に立つ・わかりやすい」という評価を得ました。「インティック・ロールプレイング」に対しては無回答の方が多く(Q1:12 (24%)、Q2:8 (16%))、判断に迷われた方が多い傾向にありました。

- ✓ 今後取り上げてほしいテーマについては、以下のようなご要望がありました。

「性障害の見極め方、そのためのインティック」(医師)、「レスビアンの妊娠出産の是非について」(看護職)、「男性、女性、異性愛といった典型的な性の在り方ではない人々(LGBT、インターフェクス)について」(学生)。

今後とも皆様からのご意見、ご要望を活かして研修会を発展させたいと考えております。

アンケートにご協力いただいた皆様に、心よりお礼申し上げます。

書籍紹介

『セックスレス時代の中高年「性」白書』

日本性科学会セクシュアリティ研究会編

荒木乳根子・石田雅巳・大川玲子・金子和子・堀口貞夫・堀口雅子著

(株) harunosora / 2,000円(税別)

セクシュアリティ研究会代表 荒木 乳根子



性科学会会員の皆様には、日本性科学会雑誌Vol.32 Suppl. 2014「2012年・中高年セクシュアリティ調査特集号」で、「調査結果と分析」「調査結果の全データ」をお届けしました。その中で、私たちが2000年調査と2012年調査を比べて最も驚いた点、夫婦間のセックスレス化が著しく進んだことをご報告しました。全くセックスをしていない人が2000年調査では4人に1人だったのが、2012年調査では2人に1人以上になっていたのです。そして、配偶者以外の異性との親密な交際は男女ともほぼ3倍に増していました。私たちはいったいこの10年余の間に何が起きたのか、という疑問をもったのでした。

ただ、あの時点ではまだ全データを読み込んでの分析が不十分な状態でした。本著はそれを補うものになったと自負します。

本著の第1章「データで見る中高年のセックス」では、調査のポイント、興味深い点をほぼもれなくまとめました。一般読者に読んでもらうことを念頭に置き、21項目について、大変分かりやすく見やすいグラフとともに解説を加えています。有配偶者だけではなく、単身者の恋愛、結婚、性生活についても取り上げました。第2章「私の経験、私の思い」では、特集号には掲載しなかった回答者の自由記載も取り上げ、テーマごとにまとめました。データの背景にある個人の営みが見え、性をめぐる男女の葛藤は深いことを改めて思います。さらに、第3章「座談会—中高年のセックスを語る」では、研究メンバーが原稿にはしにくい微妙な問題についても率直な思いを存分に語りました。内容は「夫婦のセックスレス化の現状」「セックスの多様化」「男性も女性も楽しいと思うセックス」「加齢とセックス・更年期以降のセックス」です。また、15のコラムを掲載、各研究メンバーの性に関わる臨床等から「伝えたいこと」を取り上げています。

男性と共に女性にとっても喜びとなる豊かな性の実現のために寄与したいというのが調査研究の原点です。ぜひ多くの会員の皆様に読んでいただき、共に考えることができたらと思っています。

10年ごとの調査は必要との思いがありましたので、本当は2020年過ぎに再調査をしたいところです。ただ、現研究メンバーの年齢はすでに60代後半から80代。日本性科学会の会員の皆様の中から再調査をしてくださる方が出てきてほしいと切に願っています。